

奈良文化財研究所
都城発掘調査部
創設 60 周年記念



- まぼろしの尼寺 西隆寺 -

発掘調査成果が語る
西隆寺の伽藍と建物

都城発掘調査部長
箱崎 和久

西隆寺跡第9次調査の 成果について

奈良市埋蔵文化財調査センター調査係 主務
吉田 明史

西隆寺の記憶

文化遺産部 主任研究員
高橋 知奈津

平城宮跡 資料館

近鉄大和西大寺駅下車
東へ徒歩 10 分
認識者専用の
駐車場はありません

主催：独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

【申込み方法】

住所、氏名、年齢、電話番号を明記の上、メールまたはFAXで下記までお申し込みください。

◇宛先：奈良文化財研究所 平城企画係

メール：kouenkei_nabunkan@nich.go.jp FAX: 0742-30-6750

●参加の可否を回答しますので、FAXの場合はFAX番号をご記入ください。

●メール：送信につながり一人様のお申し込みをお願いします。

（同じメールアドレスで複数の登録申し込みも可能ですが、1送信につき一人様でお願いします。）

公開 講演会

2023年11月11日(土) 定員
13時30分より (12時30分開場) 250名
事前申込順

会場：平城宮跡資料館 講堂



奈良文化財研究所都城発掘調査部創設 60 周年記念
奈良文化財研究所 第 129 回公開講演会
「まぼろしの尼寺西隆寺」

令和 5 年 1 月 11 日(土)
於：平城宮跡資料館 講堂

【プログラム】

- 12:30 受付、開場
- 13:30 開演（スケジュール説明、講演者の紹介等）
- 13:35 奈良文化財研究所長 挨拶
- 13:45 講演「発掘調査成果が語る西隆寺の伽藍と建物」
都城発掘調査部長
箱崎 和久（はこざき かずひさ）
- 14:25 講演「西隆寺跡第 9 次調査の成果について」
奈良市埋蔵文化財調査センター調査係主務
吉田 朋史（よしだ ともふみ）
- 15:05 休憩
- 15:15 講演「西隆寺の記憶」
文化遺産部主任研究員
高橋 知奈津（たかはし ちなつ）
- 15:55 終了

目 次

講演「発掘調査成果が語る西隆寺の伽藍と建物」 ······ P 1

都城発掘調査部長 箱崎 和久

講演「西隆寺跡第9次調査の成果について」 ······ P 9

奈良市埋蔵文化財調査センター調査係主務

吉田 朋史

講演「西隆寺の記憶」 ······ P 1 7

文化遺産部主任研究員 高橋 知奈津

発掘調査成果が語る西隆寺の伽藍と建物

箱崎和久(都城発掘調査部)

1. 西隆寺に関する史料と西隆寺の沿革

- ・『続日本紀』神護景雲元年(767)8・9月の記事に「造西隆寺長官」や「造西隆寺次官」がみえ、この頃造営を開始か。造西大寺使はその半年前に任命。
 - 西大寺と一対。
- ・宝亀2年(771)8月26日条によると寺印を頒布されており、この頃には寺として機能。
- ・西隆寺の寺地: 平城京右京一条二坊九・十・十五・十六坪。
 - 一長承3年(1134)5月「大和国両寺敷地図帳案」に記載あり。
 - 一また「西大寺敷地之図」(永仁5年頃: 1297; 図1)に西大寺領であることが記されている。南大門、金堂、塔、燈爐石がみえる。
- ・「西大寺伽藍絵図」(元禄11年: 1698; 図2)には具体的な堂塔が描かれるが、実際の程度が不明。発掘調査成果とも整合しないところがあり、全面的に信頼するのは危険。
- ・「西大寺現存堂舎絵図」(元禄11年: 1698)には礎石が数ヵ所描かれるが、「西大寺伽藍絵図」の堂塔とおよそ対応し、年代的にも一体として描かれたもので信用に足らない。
- ・西隆寺は10世紀には存続。『延喜式』主税上などに西隆寺料として出舉本稻の記載あり。
- ・西隆寺の廃絶(田畠化)は建長3年(1251)以前。
 - 西隆寺の実態を文献や絵画資料からうかがうことは困難。



図1 「西大寺敷地之図」(東京大学文学部所蔵)
の西隆寺部分



図2 「西大寺伽藍絵図」(西大寺所蔵)
の西隆寺部分

2. 西隆寺の発掘調査

- ・1971～73年の奈文研調査：商業施設や銀行などの開発にともなう計6次の調査。東門、金堂、塔などの遺構を確認。→『西隆寺発掘調査報告』西隆寺調査委員会、1976年：報告書A。
- ・1989～91年の奈文研調査。奈良ファミリーおよび都市計画道路建設にともなう計9次にわたる発掘調査で、金堂院東面回廊と東北部の食堂院を確認。→『西隆寺発掘調査報告書』奈文研学報第52冊、奈良国立文化財研究所、1993年：報告書B
- ・1999年の奈文研協力による奈良市の調査。奈良市の都市計画道路建設にともなう計3次の発掘調査で、金堂と回廊の一部、金堂前の燈籠や瓦敷きの遺構などを確認。→『西隆寺跡発掘調査報告書』奈良市教育委員会、2001年：報告書C
- ・2000～2001年の奈文研調査。商業施設建設にともなう計2次にわたる発掘調査。金堂院回廊と巨大な掘立柱を確認。→『奈文研紀要2001』。

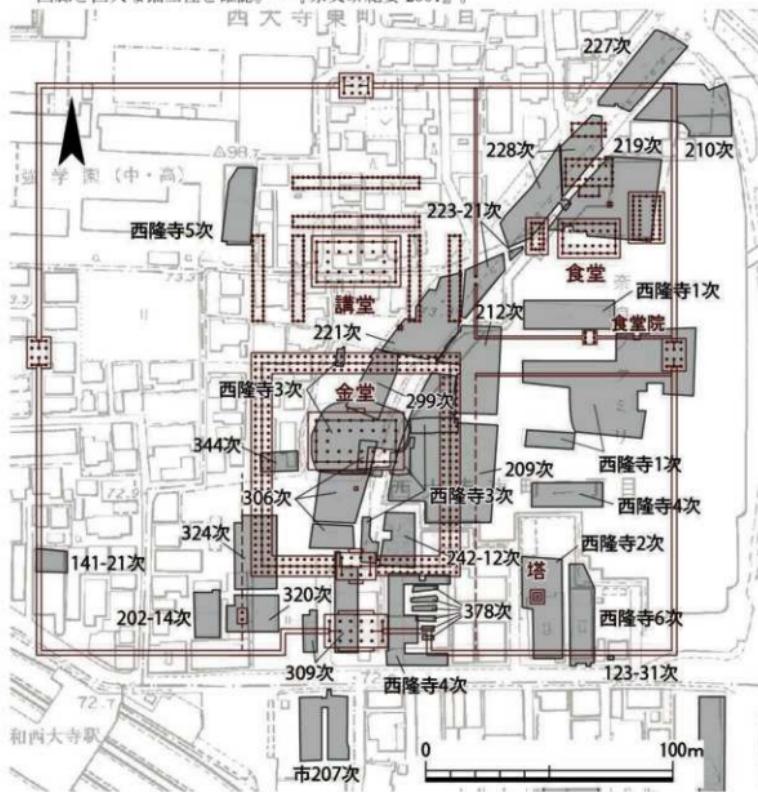


図3 西隆寺伽藍と発掘調査位置

3. 西隆寺の伽藍

- ・南大門と中門は削平を受けており不明。
- ・東門は概ね遺存。西門と北門は未発掘。
- ・平城京の条坊を踏襲した建物配置（図4）。
- ・中心伽藍は寺地東西の中央部に占地。
- ・金堂の基壇外装抜取痕跡と回廊の基壇外装や礎石の抜取痕跡を確認。
- ・北面回廊の中央に講堂はない。
- ・北面回廊北方で南北に細長い掘立柱建物を検出。尼房？ 講堂を囲む三面尼房を形成？
- ・東門付近の発掘調査で、東西方向の築地塀2条を検出。東北院と東南院の存在を示唆。
- ・東北院は建物の配置から「西大寺資財流記帳」にみえる食堂院と対応するとみられ、食堂と推定。その後、西大寺の食堂院は発掘で確認。
- ・東南院は未発掘部が多いが、塔院と推定。塔と考えられる略正方形の掘込地業を確認。
- ・西北院と西南院は発掘調査が及んでおらず、ほとんど不明。西大寺の伽藍配置（図5）の北部4院との共通性を考えると、政所院と正倉院が展開？
- ・西南院は「西大寺伽藍絵図」（元禄11年：1698：図2）では円通殿。ただし根拠不明。
- ・西南院付近に巨大な掘立柱遺構を検出。幢竿支柱？門？

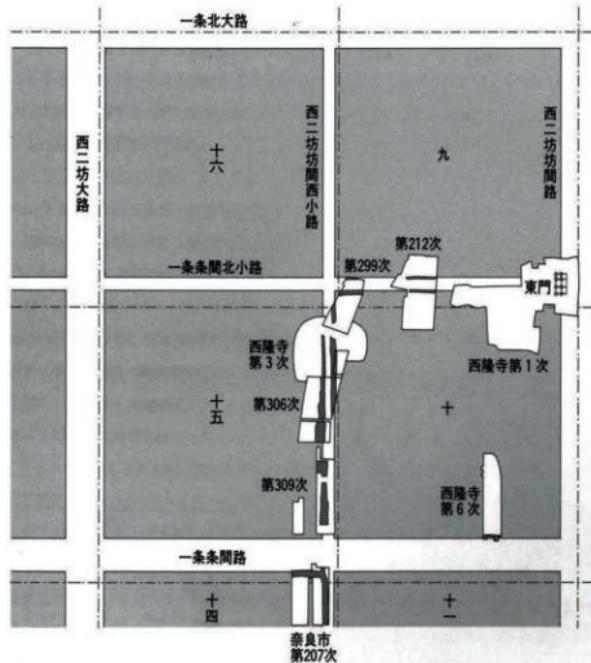


図4 平城京の条坊と西隆寺伽藍

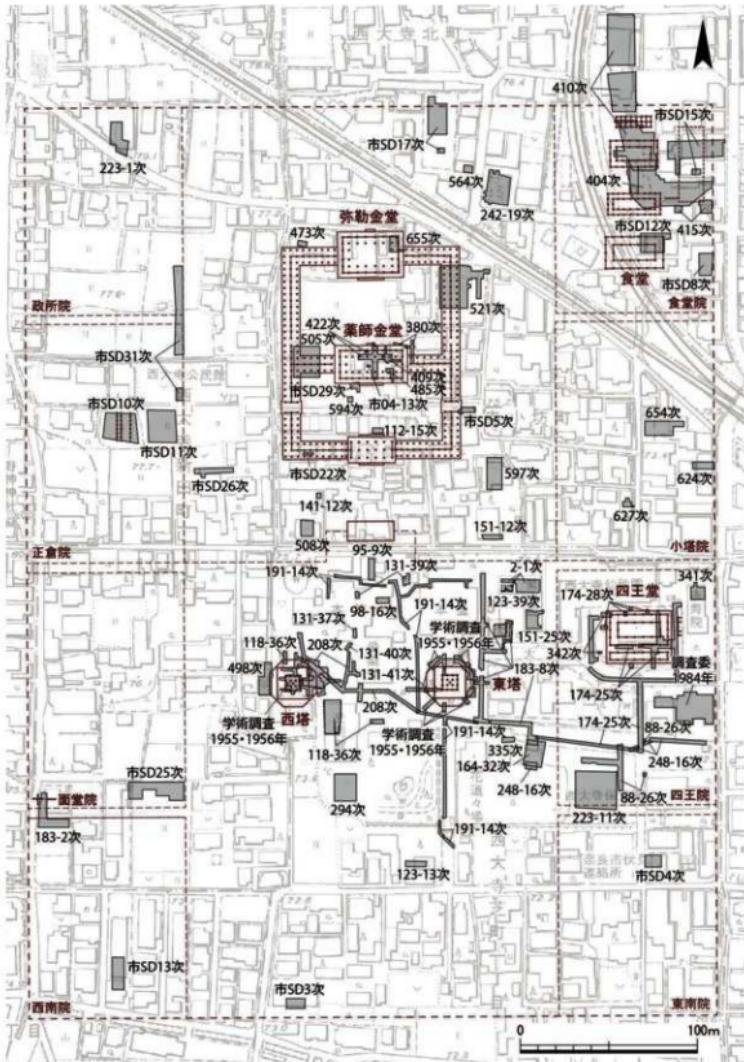


図5 西大寺伽藍と発掘調査位置

4. 西隆寺の建物

A. 東門

- ・桁行3間×梁行2間、南北棟の八脚門。桁行中央間14尺、両脇間9尺、梁行10尺。
- ・凝灰岩切石を用いた礎石を用い、棟通りに地覆石を置き扉軸摺穴を穿つ珍しい門の事例。一般的には唐居敷として横材を取外し可能に造る。
- ・現存する法隆寺東大門（桁行中央間12.5尺、両脇間9.2尺、梁行8.7尺：図8）より若干大きめ。

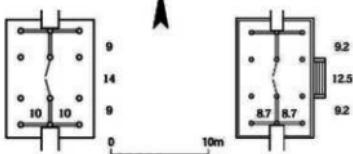


図7 西隆寺東門
復元平面図

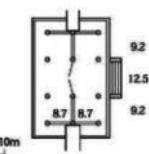


図8 法隆寺東大門
平面図

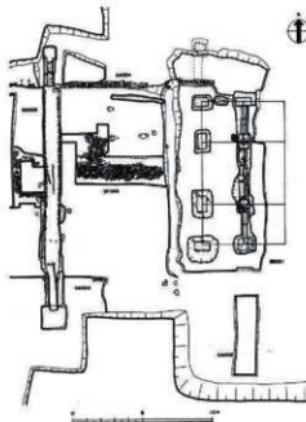


図6 東門遺構平面図

B. 金堂

- ・基壇外装の凝灰岩製の切石とその抜取痕跡を北・東・南面で確認（西面は未確認：図11）。報告書では石材の厚さと検出面の様相から延石列と解釈。
- ・延石外側間の規模は、東西38.2m（約129尺）、南北23.7m（79尺）。
- ・南面と北面に階段の突出。南面が15.9m（53尺）幅、北面が7.6m（25.3尺）幅で、出は1.5m（5尺）。
- ・以上から、柱配置は桁行7間107尺×梁行4間56尺（図9）と推定。延石の出は桁行方向11尺、梁行方向11.5尺。
- ・現在の唐招提寺金堂は、桁行7間94尺×梁行4間49尺（図10）。一まわり小さい。
- ・「西大寺伽藍絵図」（元禄11年：1698）に弥陀金堂とあり、本尊は阿弥陀如来。
- ・金堂の南および東には瓦敷きの舗装を施す。
- ・南面には燈籠跡を検出。中軸線から1.0～1.2尺東に寄る。

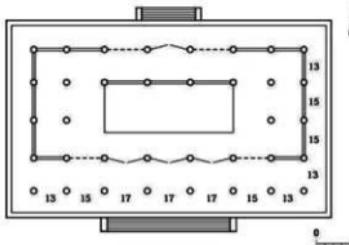


図9 西隆寺金堂復元平面図

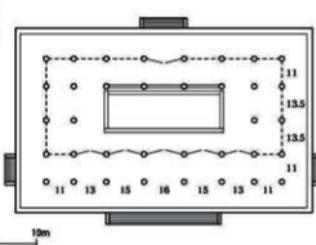


図10 唐招提寺金堂平面図

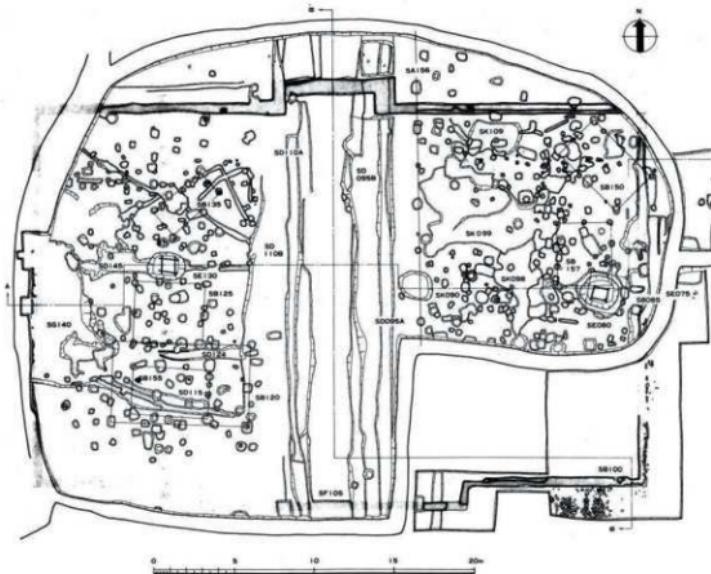


圖 11 金堂遺構平面圖

C. 回廊

- ・東面と西面の回廊の多く、および東北隅と西南隅を確認。
 - ・桁行 10 尺等間、梁行 8 尺 × 2 間。基壇幅は約 7.7m (26 尺)。: 小さな回廊
 - ・回廊は複廊（図 12）。奈良時代の官寺の一般的な回廊の形式。
 - ・基壇外装は瓦積み基壇。
 - ・北面回廊が連続し、講堂は北面回廊の位置にはない。
 - ・回廊の造構から、金堂院の規模は東西 77.6m (260 尺)、南北 84.8m (286 尺) : 複廊の外側柱間の距離。
 - 桁行 10 尺等間、梁行 8 尺では完数値で割り付けられない。
 - 北面・南面両隅 8 尺 × 2 間 × 2箇所 = 32 尺。これを東西 260 尺から引くと 228 尺。**①**片側 10 間だと余りが 28 尺（1 間門：18 尺 + 5 尺の取り付きを想定）。**②**片側 9 間だと余りが 48 尺（3 間門：13 尺等間 + 4.5 尺の取り付きを想定）。**③**片側 8 間だと余りが 68 尺（5 間門：12 尺等間 + 片側 4 尺の取り付きを想定）。**④**片側 7 間だと余りが 88 尺（5 間門：16 尺等間 + 片側 4 尺の取り付きを想定）。
 - 南北門・中門と北門の間隔は？



図 12 旗麻の模式図

D. 塔

- ・1971年に奈文研が初めて発掘（図13）。2023年5～7月に奈良市埋蔵文化財調査センターが再発掘。南北約6.5m、東西約5.7m、深さ0.7mの地盤改良の痕跡（掘込地業）を確認。
- ・底部中央付近には、東西約1.9m、南北約1.7m、深さ0.3mの土坑を発見。
- ・掘込地業には人頭大の礫を乱雑に入れる。地盤の軟弱な西半部の礫の密度が高い。
- ・底部中央土坑には重層的に瓦を入れる。出土軒瓦の年代観から8世紀末以降に構築。
- ・塔とした根拠は、資料からこの付近に塔の存在が想定される、掘込地業の平面が正方形に近く、古代寺院の堂塔で比定できるとすれば塔が最もふさわしい、の2点。
- ・中央土坑の機能を心礎下の補強と考えれば、やはり塔と考えるのが妥当か。
- ・一般的には掘込地業は基壇規模と同程度と考える。その場合、この塔の基壇規模は5.7～6.5m。屋外に現存する最も小さな室生寺五重塔の基壇は一边5.6mほど（図14）。
- ・基壇規模から三重塔とみて規模を比較。室生寺五重塔や淨瑠璃寺三重塔より小さくなる。
- ・国分尼寺には塔なし。法華寺にも東西両塔があったようだが詳細不明。古代における尼寺の塔の実態が不明確のため評価が難しいが、官寺の塔としては小さい印象。

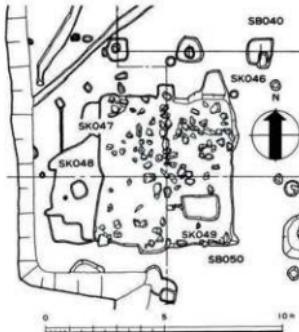


図13 塔の遺構平面図

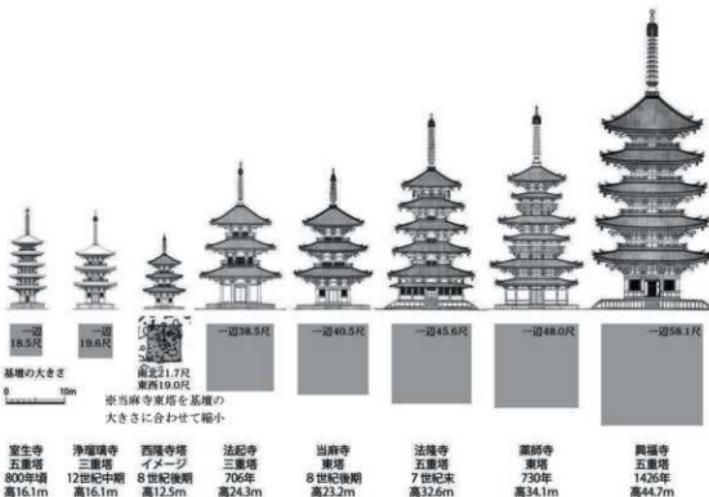


図14 西隆寺と古代の塔の規模比較

西大寺資財流記帳 (七八〇年)

食堂院	瓦葺食堂一字	長十一丈 広六丈
	檜皮殿	長十六丈 広四丈
	檜皮双軒廊三宇	各長三丈 中広一丈六尺
	瓦葺大炊殿	長九丈 広五丈 各広一丈六尺
	東榆皮厨	長十二丈 広四丈
	瓦葺倉代	長五丈 広二丈
	西榆皮厨	長十二丈 広四丈
	瓦葺倉代	長五丈 広二丈
	瓦葺甲双倉	高五尺 宽八尺
	中間	長二丈二尺八寸

5 西隆寺伽藍と発掘成果の評価

- 伽藍を東西に3分して中央に中心伽藍、周囲に院を配する：西大寺との共通性。
 - 尼寺の類例は法華寺と国分尼寺
 - 国家尼寺の具体的様相が判明する好例
 - 国分尼寺でも詳細が判明しているのは、上総と三河くらい。比較検討できる例。
 - 国家尼寺である法華寺には、鎌倉時代に東西両塔があつたことが指図などから判明するが、具体的な様相は不明。
 - 国分尼寺には塔がない。尼寺の塔の具体的な様相がわかる唯一の例。
 - 西大寺と対になる寺院。類例は東大寺と法華寺、国分寺と国分尼寺。
 - 両方の様相が判明する貴重な例。
- 東大寺○、法華寺×。上総・三河の国分寺×。

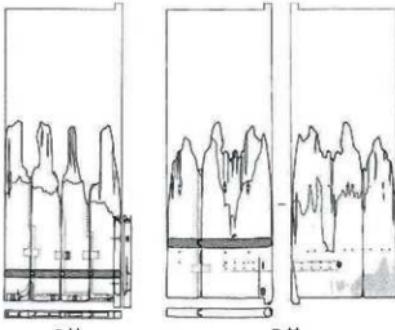


図 15 食堂院井戸転用扉板

【図版出典】

- 図1・2：『西大寺古絵図の世界』（東京大学出版会、2005年）掲載図から切り抜き／図3：奈文研作成／図4：報告書C掲載図に加筆／図5：奈文研作成／図6：報告書A／図7：報告書A掲載図をトレース／図8：奈文研作成／図9：報告書B掲載図をトレース／図10：奈文研作成／図11：報告書A／図12：『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報IV-』興福寺、2003年／図13：報告書A／図14：奈文研作成；各立面図は『日本建築史基礎資料集成 塔婆I』（中央公論美術出版、1984年）『同 塔婆II』（同、1999年）などを引用／図15：報告書B

西隆寺跡第9次調査の成果

奈良市埋蔵文化財調査センター 調査係

主務 吉田朋史

1.はじめに

今回の調査地は、平城京の条坊では、右京一条二坊十坪の南部、西隆寺の寺域の東南部にあたります。調査区の南側には 1971 年に奈良国立文化財研究所が調査し、西隆寺の塔の掘込地業として報告されています。この遺構については、当時の事業者の理解と協力を得て設計変更により保存され、花壇として整備し公開されてきました。しかし、土地所有者が変わり、当該地で新たな開発事業が計画され、保存協議を行いましたが、現状保存は不可能という結論に達したため、発掘調査を行いました。

2. 1971年(第2次)と1973年(第6次)の調査(西隆寺跡調査委員会)で分かっていたこと

- ・塔とみられる基壇建物 1 棟・寺域の南を限る大垣 1 条・掘立柱建物 1 棟・井戸 4 基などが検索されていました。

◎塔とみられる基壇建物

基壇築成前に行われた掘込地業の痕跡を検出したのみで、基壇そのものは削平されて残存していなかった。平面形状は、隅丸方形で、南北 6.2~6.0m・東西 5.6~6.0m、北辺で方形の張出しを確認している。掘込地業の深さは約 0.7m。砂と粘土に瓦片や礫を混ぜ、地業を行っている。基壇化粧石は確認されていない。

◎南面築地

1973 年発掘区南部で、黄褐色粘土の高まりがみられ、築地の位置を確認している。築地基壇の幅は約 3.0m で基壇中央部には幅 1.7m の高まりがみられ築地本体と推定されている。

◎掘立柱建物

7 間×3 間の南面廂付の東西棟建物。柱間は桁行梁行とも 3m、廂の出は 2.65m。井戸との位置関係から西隆寺造営以前の遺構と推定されている。

◎井戸

1971 年発掘区で 2 基、1972 年発掘区で 2 基確認し、内 3 基は掘立柱建物との位置関係や出土遺物から西隆寺造営以前の井戸と推定されている。

3. 今回の調査(第9次)で明らかになったこと

掘込地業を行う建物 1 棟・掘立柱建物 4 棟・掘立柱列 3 条・井戸 1 基等を確認した。

◎掘込地業を行う建物 (SB01)

- ・平面形状 隅丸方形の土坑。

- ・規模は南北約 6.5m・東西約 5.7m・深さ約 0.7mである。北辺中央には張り出しがある。
- ・底面中央には不整形な土坑が掘られている。土坑は東西約 1.9m・南北約 1.7m・深さ約 0.3mである。
- ・掘込地業の最上層は小礫で覆われており、以下は約 0.2~0.4mの礫を混ぜ込んだ黒褐色・黄褐色粘土と砂で埋められている。西辺部は軟弱地盤のため、下層まで入念に礫を入れて地盤改良を図っている。底面中央の土坑からは瓦が重層的に出土した。
- ・出土した軒丸瓦(6236F)・軒平瓦(6775A・6761A(新))の年代観から 8世紀末以降に構築されたと推定。→主要伽藍より遅れて構築された可能性あり。

掘立柱建物

前回の調査で 7間×3間の南面廂付東西棟建物とされていたが今回新たに北側を調査したこと、北面にも廂を確認し、両面廂付東西棟建物（SB02）であることが明らかになった。また、小規模な掘立柱建物 3棟を確認した。

掘立柱列

SB02 の北廂の柱列から北に 5.4mの位置で 4間以上の東西方向の掘立柱列（SA03）、南北方向の掘立柱列 2条を確認。（SA03 は SB02 と柱列を備えていることや柱間も 3mと共通することから SB02 と同時期と推定できる。）

井戸

方形の井戸枠がある井戸（SE04）を確認。構造は、隅柱横板・丸太組。重複関係から SB01 より古いことから、西隆寺の寺域になる以前の遺構である。

検出遺構や出土遺物から西隆寺の寺域になる以前の宅地として少なくとも 2 時期以上の変遷があると推定できる。

4. 掘込地業の構造と類例

掘込地業とは、礎石建物などを建てる際、地面を一旦掘り下げ、土を突き固めるなどして埋め戻す地盤改良の工法のことです。建物の範囲全体に施す「総地業」、礎石の下の部分などに施す「壺地業」、礎石列にあたる部分などを溝状に掘り込んで埋め固めた「布地業」があります。

今回検出した掘込地業は建物範囲全体に施す「総地業」にあたります。

SB01 の工事手順を遺構にもとづいて復元すると以下のようになります。

1. 建物の範囲を深さ 0.7m以上掘り下げる。

2. 底面中央に直径2m弱の土坑を掘り下げる。
3. 底面中央の土坑に粘土質の土壤と瓦を重層的に入れて埋める。
4. 地盤の弱い西半に特に多く礫を入れ、その上に黒褐色・黄褐色の粘土に礫を混ぜながら埋める。
5. 小礫を混ぜた土で埋め固める。

通常はこの上に基壇を構築し、礎石を据え建物を建てますが、今回の調査では礎石の据え付けや抜き取りに関する痕跡を確認できませんでした。底面中央をさらに掘り下げて入念に埋め固めていることから、礎石下方にあたる位置での壺地業と解釈できる可能性があります。

また、地業に際しては土を薄い層状に突き固める「版築」という工法を用いることが多いのですが、今回の例のように礫を混ぜ込む例もいくつか見受けられます。

大阪府由義寺跡の下層塔基壇（奈良時代中頃）の掘込地業は、總地業の可能性があり、内部には0.2~0.5mの花崗岩が混ぜ込まれていることが報告されています。

西大寺の弥勒金堂では、礎石の下と考えられる壺地業の中に大ぶりの礫や瓦が混ぜ込まれていました。

5. おわりに

今回の調査で、昭和46年に検出された掘込地業を行う建物を再発掘して完掘したため、掘込地業を行う際に礫を混ぜ込む技法や底面中央の土坑を新たに発見するなどその構造をさらに明らかにすことができました。しかしながら、上部構造である基壇が削平されることや小規模な掘込地業であるため、建物の性格を断定するには至りませんでした。今後の調査事例の類例や新資料の発見を待つ必要があります。

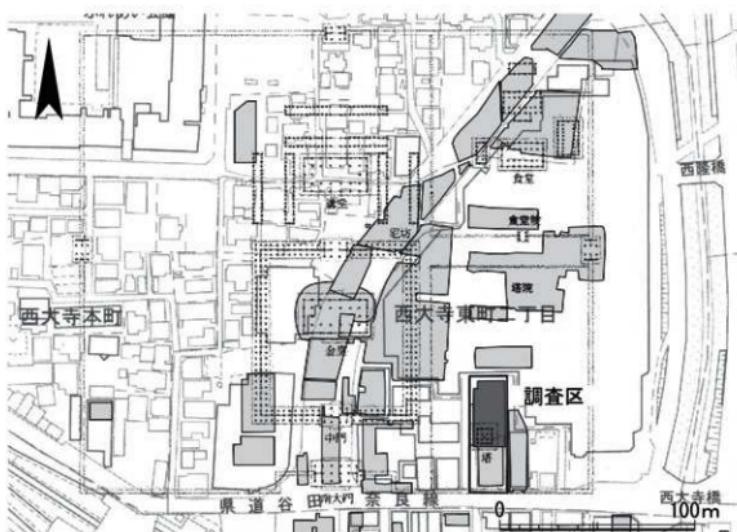
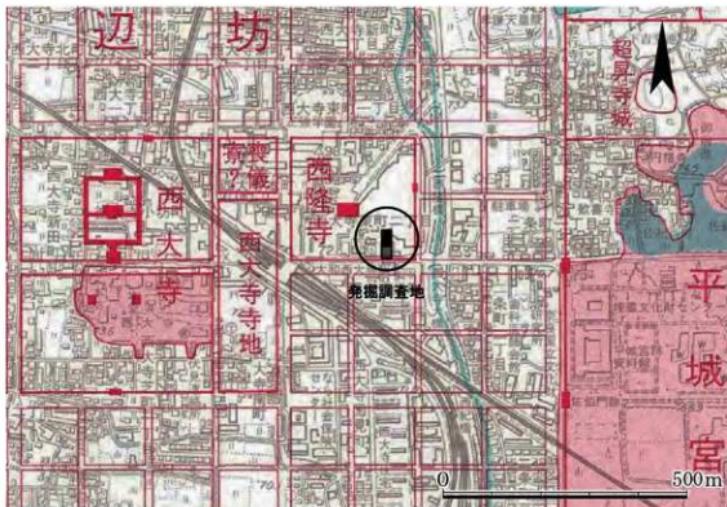
また、新たに北側部分でも発掘調査を行ったことで、比較的大型の両面廻付東西棟建物(SB02)や付随する掘立柱列(SA03)、方形隅柱横板・丸太組の井戸を新たに確認したことで、西隆寺造営以前の十坪南東部の宅地の様相が明らかになったことは、貴重な成果といえます。

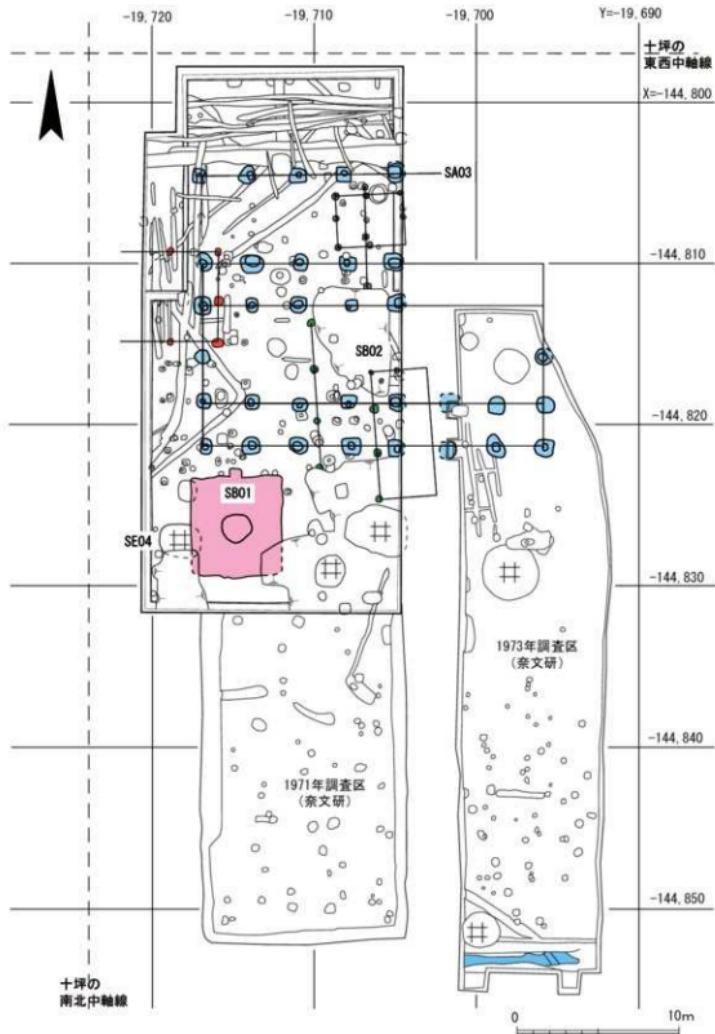
【主要参考文献】

西隆寺調査委員会 1976『西隆寺発掘調査報告書』

奈良国立文化財研究所 1993『西隆寺発掘調査報告書』

独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 2003『古代の官衙遺跡I 遺構編』





調査区遺構平面図 (1/300)



発掘区遠景 空撮（南から）



発掘区南部 空撮（垂直・上が北）



掘込地業を行う建物 SB01（南西から）



掘込地業を行う建物 SB01 堆積状態（東から）



SB01 挖込地業底面中央の土坑（東から）



井戸 SE04 井戸桿出土状態（南から）

第129回公開講演会
令和5年11月11日（土）

西隆寺の記憶

高橋知奈津（文化遺産部）

1. 大和西大寺駅の成り立ち

- ・大正3年（1914）大阪電気軌道 上本町～奈良駅間が開通。西大寺駅開業。
- ・大正9年（1920）鉄線開業に伴い、150m西へ移転。
- ・大正10年（1921）棚田嘉十郎らによる土地の買い上げ
- ・大正11年（1922）平城宮跡史跡指定
- ・昭和3年（1928）奈良電気鉄道 桃山御陵駅～西大寺駅間開通。十字平面交差。
- ・昭和6年（1931）奈良市の都市計画区域を決定。
- ・昭和7年（1932）大軌西大寺駅に改称。
- ・昭和16年（1941）大和西大寺駅に改称。

2. 戦後の奈良の発展と、大和西大寺駅界隈

- ・昭和20年（1945）アメリカ軍奈良市進駐。
- ・昭和25年（1950）奈良国際文化観光都市建設法、成立。
- ・昭和27年（1952）平城宮跡特別史跡指定。
奈良市教育委員会発足。奈良文化財研究所設立。
- ・昭和28年（1953）一条通りの拡幅、平城宮跡第一次調査。
- ・昭和35年（1960）奈文研・平城宮跡発掘調査事務所、設置。奈良遷都1250年祭。
- ・昭和36年（1961）近鉄検車区建設計画、保存運動により計画変更へ。
- ・昭和38年（1963）奈文研・平城宮跡発掘調査部、設置。平城宮跡国費買上決定。
- ・昭和39年（1964）国道24号バイパス計画、東一坊推定地の発掘調査。
- ・昭和41年（1966）古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法、公布。
西大寺一条線、当初計画決定告示。
- ・昭和43年（1968）平城ニュータウンにかかる奈良市・日本住宅公団、覚書締結。
大和郡山市・天理市・生駒町・奈良市で北和都市連合協議会発足
国道24号線バイパス計画変更。
- ・昭和44年（1969）西大寺公民館、落成。
- ・昭和45年（1970）奈良県『大和都市計画』で市街化区域／調整区域の仕分け。
- ・昭和46年（1971）平城ニュータウン起工式。

3. 1970 年代前半の大和西大寺駅周辺の開発と調査

平城ニュータウン建設構想を契機とした開発で、市道・谷田奈良線沿いにショッピングセンターや銀行が建設ラッシュ。水田が急速に減少。

- ・ 1971 年 3 月、ダイアモンドシティと近畿日本鉄道の共同出資の新会社ダイアモンドファミリーが、近鉄百貨店西大寺店を含むショッピングセンターの建設計画を発表。
→ 東門の礎石群を一時撤去し、工事完了のうちに原位置に復元して店舗内に保存。
- ・ 奈良国立文化財研究所が、予定地を予備調査したところ、東門の礎石と地覆石を発見。
奈良県は、文化庁の指導のもと、西隆寺跡調査委員会を結成。
- ・ ショッピングセンター建設予定地を、3 月～5 月に発掘調査（西隆寺第 1 次）。
→ 銀行店舗の設計を一部変更して塔の遺構を、建築用地から除外し、埋戻しの上、上部に方形の花壇を造って位置を示す。
- ・ 開発計画がなされる以前に金堂跡を確認しておく必要を考慮。12 月～1972 年 2 月、金堂跡の学術調査（第 3 次）を実施。
→ 金堂の遺構を埋め戻し保存。
- ・ 同 12 月～1972 年 3 月、神戸銀行店舗建設に伴う発掘調査（第 4 次）で、南面築地跡確認。
→ 築地の遺構を埋め戻し、舗装タイルや目地の色を違えて位置を地表に表示。
- ・ 1972 年 3 月 14 日、日本で初めての 2 核ショッピングセンターである「奈良ファミリー」オープン。約 8 万人が押し掛けた。
- ・ 1973 年 4 月～7 月、正強学園校舎改築に伴う発掘調査（第 5 次）で、掘立柱建物、井戸などの遺構を確認。
- ・ 1973 年 5 月～7 月、住友信託銀行店舗建設に伴う発掘調査（第 6 次）で、南面築地、井戸などの遺構を確認。
→ 築地の遺構を埋め戻し、舗装タイルや目地の色を違えて位置を地表に表示。

4. 1980 年代末から 90 年代初頭の開発と調査

奈良市が大阪のベッドタウンとして発展、西大寺が奈良市の副都心化。大型店出店ラッシュで大規模開発が進む。

- ・ 1979 年「奈良ファミリー」増床を申請したが、行政指導により取り下げ。
- ・ 1981 年、奈良市商店街振興連絡協議会が、奈良市議会に大型店出店凍結請願。
- ・ 1982 年、西大寺一条線街路整備事業、路面を上げて遺構保護することを条件に事業認可。
- ・ 1986 年 3 月、大型店出店凍結請願が取り下げ。
- ・ 1987 年「奈良ファミリー」の改築、大幅な増床、立体駐車場の建設計画。

- ・1989年～1991年、ショッピングセンター予定地の発掘調査。
- ・1990年、西大寺駅北地区商業地について、地区計画制度導入（商業地では県内発）。
 - 金堂回廊（東北隅）の遺構は埋め戻し、遺構復元表示。
 - 東門の柱位置、店内に平面表示か。
 - 東門跡、塔跡、南面築地跡、解説板の設置か。
- ・1991年～1992年、西大寺一条線の北3分の2の事前発掘調査。
- ・1992年11月「ならファミリー」リニューアルオープン。

5. 1990年代末から2000年代初頭の開発と調査

西大寺一条線の全面開通。奈良市の国際文化観光都市としての取り組みが活発に。

- ・1998年 「古都奈良の文化財」世界遺産登録
- ・1999年 西大寺一条線、南3分の1の事前発掘調査（西隆寺中央伽藍）。
- ・2000年～2001年 複合商業施設建設の事前発掘調査（西隆寺域西半部）。
 - 西半部の遺構の解説板「西隆寺の記憶」設置（2005年ごろ内容更新）。
- ・2002年10月、サンワシティ西大寺、竣工。

6. そして、現在

ターミナル駅として、さらなる進化。南北をつなぐ一體的なまちづくりへ。

- ・2016年、奈良市と近鉄、西大寺駅南北自由通路の整備事業着手。
- ・2018年、国営平城宮跡歴史公園、第一次開園。
- ・2020年4月、南北自由通路供用開始。
奈良県、西大寺駅の高架化、平城宮跡からの移設案を提示。
- ・2021年3月、南口駅前広場、供用開始。
- ・2023年4月、北口駅前広場、供用開始。
「歩行者利便増進道路」（ほこみち制度）を活用する計画。
- ・2023年6月、近鉄線移設案の凍結。

【参考文献】

奈良県教育委員会『西隆寺金堂跡発掘調査概報』1972、西隆寺調査委員会『西隆寺発掘調査報告書』1976、奈良国立文化財研究所『西隆寺発掘調査報告書』1993、奈良市教育委員会『西隆寺跡発掘調査報告書』2001、『奈良文化財研究所紀要 2001』『同 2005』、中本宏明『奈良の近代史年表』1981、『平城ニュータウンのあゆみ』1997、『ジャスコ三十年史』2000



図1 東門の遺構、南から 1971年



図2 東門跡 解説板と遺構表示、北から 1992年



図3 塔の遺構、北から 1971年



図4 塔跡 遺構表示、北から 1973年



図5 南面築地の遺構、東から 1972年



図5 南面築地跡 遺構表示、西から 1992年



図7 回廊東北隅の遺構 東から 1990年



図8 回廊東北隅 遺構表示、北から、1992年